

ミャンマーのさらなる成長を後押し 01



ロイコー総合病院の着工式典で杭打ちを行う田中理事長(奥)とカヤー州のキン・マウン・ウー知事



経済の中心地、ヤンゴンの街並み。近年の成長は著しく、多くの日本企業が進出に関心を示している(撮影:谷本美加)

2月6日から11日にかけて、JICAの田中明彦理事長がミャンマーを訪問し、両国の関係のさらなる発展を目指して、テイン・セイン大統領やアウン・サン・スーチー国民民主連盟議長らと会談しました。大統領は、各分野における日本の協力について感謝の言葉を述べるとともに、経済特区の整備に向けた日本の役割の重要性を強調しました。これに対し田中理事長は、ミャンマーの重要課題である地方開発、インフラ整備、人材育成・制度構築などに対するJICAの協力やその進捗を伝えました。

2月7日に開催された第3回ミャンマー開発協力フォーラムでは、田中理事長が基調講演を行いました。講演では、ミャンマーのこれまでの取り組みを評価した上で、社会・政治・経済がより一層、包摂的な構造へ転換するために、長期的な取り組みが必要である点を指摘。そのためにJICAは、「国民の生活向上」「人材の能力向上」「持続的経済成長のためのインフラや制度の整備」を柱とした支援を続けていくことを説明しました。

9日には、少数民族地域であるカヤー州で行われた「ロイコー総合病院設備計画」の着工式典に出席しました。同病院は1950年代に開設された州で唯一の総合病院で老朽化が著しいことから、JICAは無償資金協力を通じて、新しい病院棟の建設、X線診断装置や救急車などの医療設備の支援を行うことになりました。

また、保健医療従事者の能力強化を図る技術協力も実施する予定です。田中理事長は、ハードとソフトの両面から支援を行い、全ての人が負担可能な費用で保健医療サービスを受けられる「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ」の実現に向け協力していくことを強調。これに対し、カヤー州のキン・マウン・ウー知事からは、JICAが同州内で実施する協力に対する感謝が述べられました。

東日本大震災から4年—仙台で防災を考える 02



JICAの田中明彦理事長がパネリストとして参加した国際シンポジウム

3月14日から5日間、世界各国の防災関係者が一堂に会し、防災戦略を議論する「第3回国連防災世界会議」が宮城県仙台市で開催されました。開幕の前にJICA主催で行われた国際シンポジウムでは田中明彦理事長が基調講演を行い、あらゆる開発政策や計画に防災の視点を導入する、防災の主流化の重要性を訴えました。各国の首脳や国際機関の代表も続いて登壇し、防災における中央政府の役割や、事前投資の必要性について議論を交わしました。

また、17日に「防災と人間の安全保障」をテーマに行われたパブリック・フォーラムでは、田中理事長が「防災への取り組みでは、必然的に人間的・社会的要素に配慮することが求められる」と述べ、JICAも包摂的で人々を中心に据えた取り組みを進め、被災地が再び自然災害にさらされないよう配慮してきたことを強調しました。

エッセイを通じて、国際協力の未来を考える 03



高校生の部を代表して受賞の言葉を述べる増田さん

2月28日、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2014」の表彰式が東京・市ヶ谷で行われました。このコンテストは全国の中学・高校生に開発途上国の現状と国際協力について理解を深めてもらうことが目的。今回は「つながりに私が見たいこと」をテーマに、中学生の部に3万7669点、高校生の部に2万8793点の作品が寄せられました。

表彰式では、最優秀賞を受賞した高橋裕さん(宮城県・岩沼中学校)と、増田愛理さん(東京都・雪谷高等学校)が代表であいさつ。アメリカで教わった「ベイ・フォワード」という言葉についてつづった高橋さんは、「善意の山が世界を動かすかもしれない」と訴えました。また増田さんは、歩行を補助する装具をカンボジアに送る活動を行ったことで、「世界とのつながりを身近に感じた」と語りました。